千葉大学人文公共学府　研究プロジェクト報告書　第 370 集　pp. 1-9　2022 年
『文化交流研究』

ゼウクシスの“笑い死に”について
Pictor Zeuxis risui mortuus

石井正人
Masato ISHII

１．レンブラントの「笑う自画像」の伝説

レンブラントの晩年の自画像「ゼウクシスとしての自画像」は、「笑う自画像」という特徴を持っているが、何を笑っているのか、左端に見える人物は何者なのか、なかなか謎めいた印象を受ける。

Rembrandt van Rijn. Self-Portrait as Zeuxis Laughing.　(1662-63)
Oil on canvas.
Wallraf-Richartz Museum

弟子のアール・デ・ヘルデルが描いた自画像がどうやら同じテーマで、レンブラントもへ

ルデルも、老婦人の絵を描きながら笑っているらしい。

Aert de Gelder. Self-Portrait at an Easel Painting an Old Woman　（1685）
Oil on canvas
Stadelsches Kunstinstitut, Frankfurt

「笑う自画像」の元になっているのは、紀元前 4 世紀頃活躍した古代ギリシャの画家ゼウクシス Ζεῦξις の死についての伝説なのだそうだ。ゼウクシスの作品は現存していないが、絵画史高く評価された大画家であった。

ゼウクシスのところへ裕福な老婦人が来て、肖像画を注文した。それも美の女神アフロディーテに模した画像を所望された。老婦人がアフロディーテの扮装をしてポーズを決める前で、ゼウクシスは作品を注文通り完成させた。ゼウクシスはその自作の絵の出来映えを見て、その滑稽さに笑いが止まらなくなり、とうとう「笑い死に」したというのである。

現代の目から見ると、エイジハラスメントとセクシャルハラスメントで一分の隙も無くかためられた伝説で、それほど質の高い笑いとも思えないが、レンブラントくらいになるとこういう伝説に自らを模しても、独特の陰影と深みを作り出すものなのであろうか。

しかし本稿の目的は、レンブラントの作品の解釈でもなく、バロック絵画における「笑う自画像」の意義を考察することではない。

ゼウクシスのエピソードの多くがプリニウス『博物誌』第 35 巻の「画家列伝」[1]に伝えられている。しかし「笑い死に」のエピソードは見当たらない[2]。いくつかの論文や記事をあたり、注をたどってみたが、古典古代にさかのぼる出典を示してくれた二次資料は一つだけであった[3]。どうやら、この「ゼウクシスの笑い死に」のエピソードを明示してくれる現存最古の史料は、Festus の De verborum significatione の、10 世紀頃に成立した異本の系統の一つであるらしい。本稿の目的は、この史料における「ゼウクシスの笑い死に」の記述について考察することである。

2. ゼウクシスの「笑い死に」を伝えるフェストゥスの『辞典』について

最初にフェストゥスの『辞典』の伝承状態についてまとめておく[4]。

主要な写本は以下の通りである：

---

[1] Perseus のサイトから引用する。
http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus%3Atext%3A1999.02.0138%3Abook%3D35%3Achapter%3D29　（2022.2.23 最終閲覧）Plinius:naturalis historia, 35, 29.
descendisse hic in certamen cum zeuxide traditur et, cum ille detulisset uvas pictas tanto successu, ut in scaenam aves advolarent, ipse detulisse linteum pictum ita veritate repraesentata, ut zeuxis alitum iudicio tumens flagitaret tandem remoto linteo ostendi picturam atque intellecto errore concederet palmam ingenuo pudore, quoniam ipse volucres fefellisset, parrhasius autem se artificem. fertur et postea zeuxis pinxisse puerum uvas ferentem, ad quas cum advolassent aves, eadem ingenuitate processit iratus operi et dixit: "uvas melius pinxi quam puerum, nam si et hoc consummassem, aves timere debuerant."
「この画家（パラシウス）は，ゼウクシスと絵の優劣を競ったことがあったと伝えられるが，ゼウクシスがとても見事にブドウを描いた絵をもって会場に現れると，（餌だと勘違いして）鳥たちがその場に飛び降りてきたほどであった．パラシウスの方は幕を迫真の筆致で描いた絵を持って参加したので，鳥たちの審判に気を良くしたゼウクシスが、その幕を取って絵を見せろ，と迫り，自分の間違いに気付くと，自分は鳥を欺いたが，パラシウスは画家である私を欺いたのだからと，率直に間違いを認めて勝ちを譲った，ということである．
また次のようにも言われていて，その後ゼウクシスはブドウを持つ少年の絵を描いたが，このブドウにまた鳥たちが飛び降りてきたところ，同じように率直に自分の作品に不満を表し，次のように言った：私は少年よりもブドウの方を上手く描いてしまったのだ，もし（少年を）完成させていたなら，鳥たちは恐れて近付かなかったにちがいないのだから．」
このゼウクシスのパラシウスとの競争における「幕、覆い(lineus)」のモティーフがまた、リオタールの「笑う自画像」に反映されているのだそうである。注 2）の Bark の論文を参照。
[2] 英語版 Wikipedia がこの伝説を伝えているが（ドイツ語版にはない）
https://en.wikipedia.org/wiki/Zeuxis_(painter)（2022.2.22 最終閲覧）
ここで典拠とされているのが次の論文である。Julianna M. Bark: The spectacular self: Jean-Etienne Liotard's Self-Portrait Laughing. Article 5, Inferno Vol. XII, 2007-8.
https://ojs.st-andrews.ac.uk/index.php/nsr/article/view/36/29 (2022.2.22 最終閲覧)
ただし、ここでは、更に別の論文を根拠に、この伝説が Karel　van　Mander's　Schilderboek (1604) にあると述べられている。この van Mander の著書は電子版で公開されているが、この伝説の記述は見当たらない。https://www.dbnl.org/titels/titel.php?id=mand001schi01　（2022.2.22 最終閲覧）
https://books.google.co.jp/books?id=m1s-AAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false
（2022.2.22 最終閲覧）
[3] Johannes Adolf Overbeck: Die antiken Schriftquellen zur Geschichte der bildenden Künste bei den Griechen. Leipiz 1868. S.313, 史料番号 1658.
[4] Wallace M. Lindsay: Sexti Pompei Festi de verborum significatione (Leipzig 1913), pp.III-XXVIII; Flay Glinister et al : Verrius, Festus and Paul: Lexicography, Scholarship, and Society. (Bulletin of the Institute of Classical Studies Supplements, 2007)

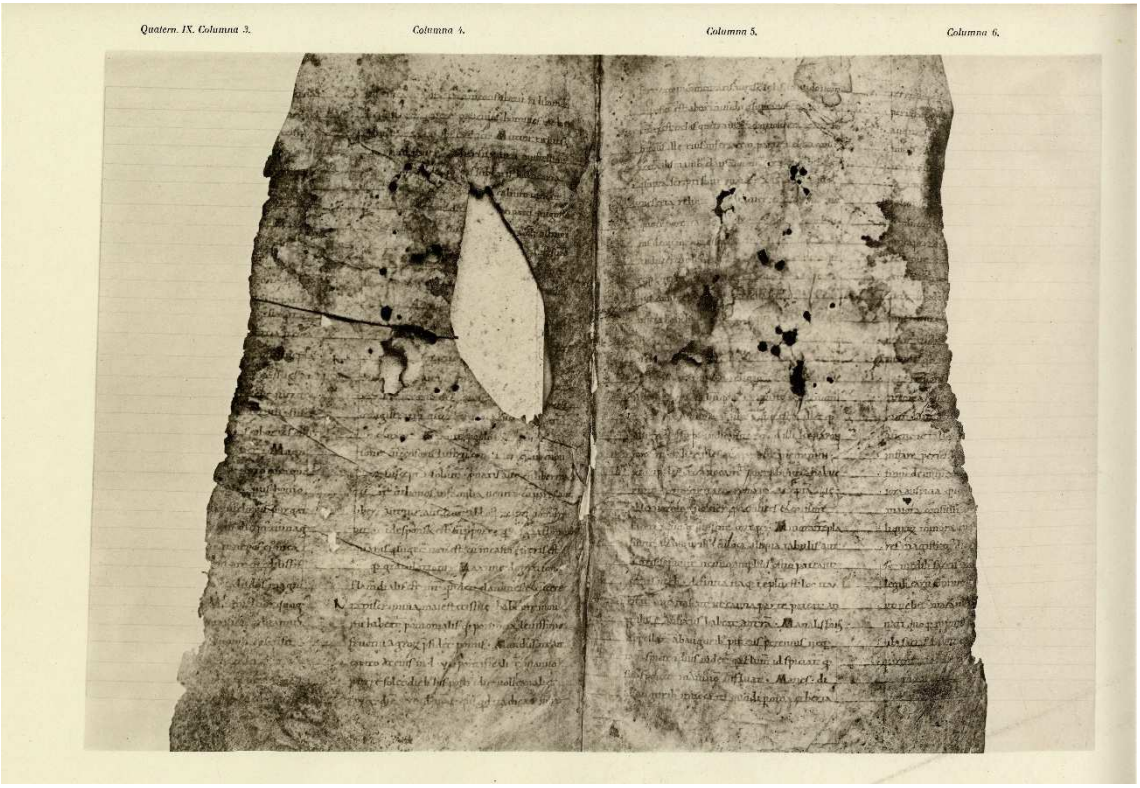
E = cod.Escorialensis O III 31 saec. X
F = cod.Farnesianus IV A3 saec. XI
G = cod.Guelferbytanus Aug. 10, 3 saec. X
I = cod.Leidensis Voss. 37 saec. X/XI
L = cod. Leidensis Voss. 116 saec. X
M = cod. Monacensis 14734 saec. X/XI
P = cod. Cheltenhamensis Phillippsianus 816 saec. XI in.
R = cod. Leidensis Voss. 135 saec. X
T = cod.Trecensis 2291 saec. X/XI
U = cod.Vaticanus 3368 saec. XV
V = cod.Parisienses schedae (Inv.Rés.X 96) saec.XV
W = cod.Vaticanus 3369 saec.XV
X = cod.Vaticanus 1549 saec.XV
Y = cod.Leidensis Voss O9 (saec.XV) corrector quidam
Z = cod.Vaticanus 2731 saec.XV

あまりにも伝承状態がひどいので、各種校訂版の写本解題において、写本系図を作ろうとする気配もない。

初期の帝政ローマで活躍した文法学者フラックス Marcus Verrius Flaccus (c. 55 BC – AD 20)が浩瀚な辞典 de verborum significatu を著した。この著作の全体は現代に伝わっておらず、それより 200 年ほど後代の Sextus Pompeius Festus (生没年不詳。2 世紀頃)が作った 20 巻の簡略版が、種々の異本(apographa)によって断片的に残存している。中世には盛んに使われたようだが、こういう実用書はかえって保存状態が悪くなるようだ。原テクストをそのまま大事に残そうというよりは、わかりやすく使いやすく修正補強していくことを考えるのは当然であろう[5]。

その一方、テクストの扱いは最悪になる。フラックスの原本が失われてしまったことばかりではない。諸写本の中で、古い形を伝える、最も重要なものは F 写本とされるが、15 世紀にシュパイアーで発見されたこの写本は、多くの部分が失われ、水につかり、半分くらいが燃えてしまった、惨憺たる状態であった[6]。

[5] 実際にヴァティカン所蔵の U 写本や W 写本を見ると、読みやすいレイアウトに、類語集まで付録に付いているという手篤さである。
[6] Thewrewk de Ponor, Aemilius: Codex Festi Farnesianus. Acad. Litterarum Hungarica 1893.



よく見えないかもしれないが、これは、残った写本の残骸の最初のページをめくったところである。左右にページが開かれていて、真ん中に「のど」の部分が来ている。各ページは、2 段組になっている。ところが、写本を閉じた状態で、小口から燃えてしまったらしく、左のページの左側の段と、右側のページの右側の段がほとんど消失している。

フェスティスの『辞典』は 20 巻あったようだが、この写本に残っているのは、IX 巻、XI 巻の一部、XII 巻、XIII 巻、XIV 巻、XV 巻であった。これで、M の項の途中から T の項の途中までのようである[7]。これを異本から補って原テクストを復興しようとするのだが、並大抵の苦労ではない[8]。

さて、ここでようやく本論の対象であるゼウクシスに関する記述の問題に入れる。ゼウクシスの「笑い死に」の記載は、Pictor Zeuxis「画家ゼウクシス」という項目を立てて説明されていたらしい。つまり、P の項に含まれていたらしい。ところが、P の項のうち、それに当たる部分になる X 巻が、F 写本の残存部分には失われている。Pictor Zeuxis の項目は、異本伝承から拾ってこなくてはならないのである。

U 写本や W 写本のような、15 世紀というかなり下った時代に成立した、実用的辞書とし

---

7) 断言しにくいのは、このような写本の状態なので読み取りが難しい、ということだけではない。アルファベット順に語彙を並べる原則が、だいたい守られているのだが、ところどころよく分からない理由で順番が乱れている。このせいで、アルファベット順にだけ依拠して、損失部分を確実に推定できないのである。

8) 異本からかき集めて、A の項から「完全に」復元を試みるか、F 写本の判読可能な範囲で原テクストを復元しようとするか、それ自体難問になる。

てよく整理編集されたヴァージョンをみると、P の項に Pictor Zeuxis の項目が省かれてしまっている。「picta とは染色された toga のことである」というような前後の語彙は拾ってある。これはつまり、後期中世から近世にかけて編集された新編集の辞典では、「ゼウクシスの笑い死」のような奇妙な（面白い）エピソードを伝える特殊な「事典」的項目が、不必要なものであると判断され、整理されていったということであろう。おそらくもともとフラックスの著作が持っていた「事典」的性格が切り捨てられていき、後世の語学的関心から、実用的だが無味乾燥な語彙集に改編されていく過程が示されているのだと思う。

それ自体は広い意味での言語学史、レキシコグラフィの歴史として興味深いが、本論の目的は、こういう史料状態の中で「ゼウクシスの笑い死」の最古の形をさぐることである。

3. フェストゥスの『辞典』におけるゼウクシスの「笑い死に」について

Lindsay の校訂本においては、Pictor Zeuxis の項目を次のように復元してある[9]。

Pictor Zeuxis risu mortuus, dum ridet effuse pictam a se [anum] *γραῦν.* Cur hoc loco relatum sit a Verrio, cum de significatu verborum scribere propositum habuerit, equidem non video, cum versiculos quoque ea de re rettulerit et ineptos satis et nullius †praetoris† praetexto nomine ; qui tamen sunt hi : „Nam quid modi facturus risu denique ? nisi pictor fieri vult, qui risu mortuus est.“

「画家ゼウクシスは、自ら描いた老女のことを大声で笑ったとき、その笑いで死んだ。何故こんなことがこの箇所に、この辞典を著そうとしたときウェリウス・フラックスによって書かれたのか、私には全く分からない。なぜなら少ない行数でこのことを語り、不十分であり、学識者の発言（？）があげられていないからだ。それは、このようなものである。『一体どうやったら笑いでそこまでになるというのか？笑いで死んだという画家自身がそれを望んだのでなければ。』」

ここで考えてみたいのは、第 2 文の、編集者フェストゥスが書き込んだらしい注釈である。

その中で、「学識者の発言」と仮に訳しておいた、praetoris praetexto は、そのままだと「法務官の口実」となり、全く意味が分からない。古くからこの箇所は疑問視されていて、おそらく prae-という接頭辞にひかれ、praetor はここでは、pretius「賞賛すべき人」という意味を表すという誤解で使われているのだろうと推定されてきた[10]。Lindsay はさすがに現代的な校訂方法を採り、praetoris という疑問のある文言をそのままにして（ダガーではさんで注意喚起して）テクストを作った。

---

[9] Lindsay cit.op. p.228
[10] Sextui Pompeii Festi de verborum significatione.Libri XX. London 1826. p. 593

ここは違う見方も出来る。ラテン語に冠詞がないので判断が付かないが、Praetor がある特定の政府高官を指しているかもしれない。「ゼウクシスの笑い死に」については、少なくともフェストゥスの時代までは、ローマのある高官のコメントと共に流布していた可能性もありはしないだろうか。もちろん今となっては、史料の乏しさから断定などはできないことであるが。

何故そのような可能性もここで考慮に入れようとするのかというと、もしもこの奇妙な伝説に対する批判的見解に具体性があるとするなら、この項目を支えている合理性がより明確になるようにも思われるからである。

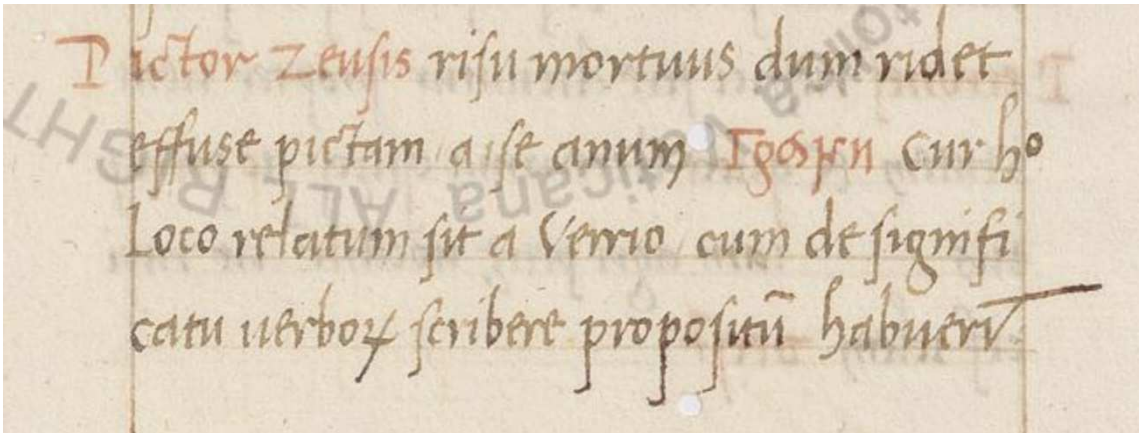
「ゼウクシスの笑い死に」を記す短い一文に、編集者フェストゥスと、Praetor のコメントが続く。フェストゥスは、原著者フラックスの執筆方針に疑問を呈し、批判を述べる。そもそもこんな話はこの辞典に相応しくない、どうしても載せるというのなら、しかるべき批判を添えるべきであり、Praetor の次の批判的コメントは欠かせない、というのである。Praetor のコメントは強烈である。「笑い死に」などがあるはずはない。本人が笑いながら死のうとした、それを望んだ、ということなのだろう、と。

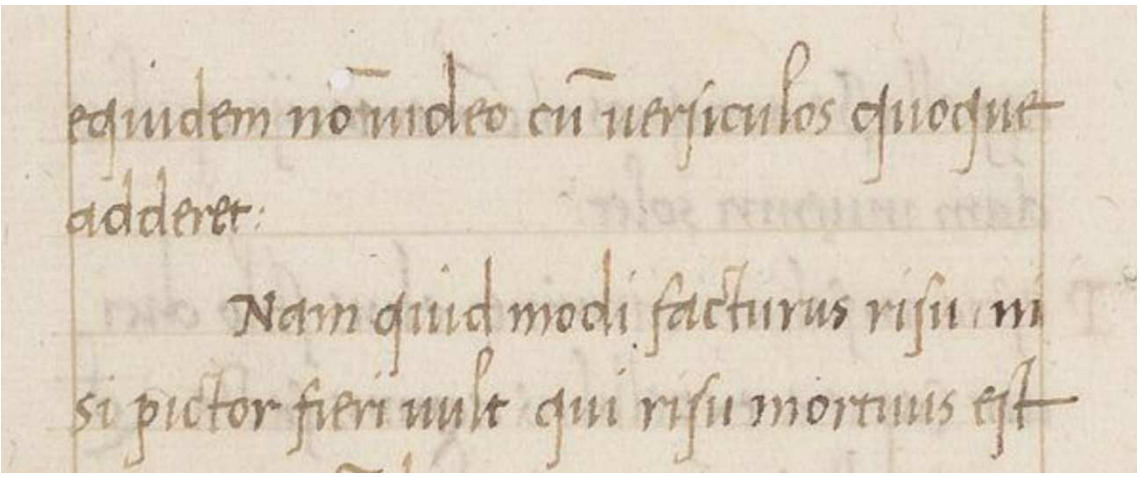
第 1 文「画家ゼウクシスは、自ら描いた老女のことを大声で笑ったとき、その笑いで死んだ。」Pictor Zeuxis risu mortuus, dum ridet effuse pictam a se [anum] *γραῦν* が伝える内容を考察する際に、生真面目で合理的な文法学者フェストゥスと、誰か分からないが合理的な Praetor は、文中の「老女」のことなど歯牙にもかけない。エイジハラスメントやセクシャルハラスメントで「面白おかしく」お話を膨らまそうなどという気は全くなさそうだ。話の中心テーマは「死」であって、この厳粛なテーマに「笑い」がどのように接合されうるか、それを考えることが議論の要であるという態度に揺るぎもない。

この場合、無味乾燥な文法学の生成過程にあったらしいフェストゥスが、このような融通の利かない真面目な態度をとり続けるのは当然としても、Praetor の批判的態度は印象的である。死と笑いがどのように結びつきうるか、それは死を前にした豪胆な態度、あるいは従容として死に就く、という態度だろう、というのだ。これは、セネカのような、ストア哲学的態度を考えるべきところではないか。

そして、何故この話に「老女」が出てくるのかといえば、つまり死の象徴なのであろう。画家が自ら描いた老女とは、すなわち死の象徴に他ならなかった。そのことに気付いて、笑いで答えた。死を笑いで迎えた、という意味に取るべきなのだろう。

私はこの Pictor Zeuxis を伝える異本の写本を、X 写本（cod.Vaticanus 1549）しか見ることが出来なかった。問題の箇所は、このヴァティカン写本 1549 では次のようになっている。


Pictor Zeusis risu mortuus dum ridet
effuse pictam a se anum γραῦν. Cur ho
loco relatum sit a Verrio cum de significa
tu uerborum scribere propositum habuerit


equidem non uideo cum uersiculos quoque
adderet:
Nam quid modi facturus risu ni
si pictor fieri uult qui risu mortuus est

Pictor Zeusis risu mortuus dum ridet effuse pictam a se anum γραῦν. Cur ho loco relatum sit a Verrio cum de significatu verborum scribere propositum habuerit, equidem non video, cum versiculos quoque adderet：Nam quid modi facturus risu nisi pictor fieri vult qui fusu morsus est.

「画家ゼウクシスは、自ら描いた老女のことを大声で笑ったとき、その笑いで死んだ。何故こんなことがこの箇所に、この辞典を著そうとしたときウェリウス・フラックスによって書かれたのか、私には全く分からない。なぜなら少ない行数を付け加えているからだ。『一体どうやったら笑いでそこまでになるというのか？笑いで死んだという画家自身がそれを望んだのでなければ。』」

伝承に混乱のあったらしいこの項目を、このヴァティカン写本 1549 はこのように処理している。Praetor 以下の既に当時不明となったいきさつを全てカットし、Praetor の重要なコメントはフラックスの原著の時点で既にそこにあったものとし、こんなことを書かなければならないのだったら、そもそもこんな項目は不必要であろう、というふうに編集者フェス

トゥスのコメントを改編している。

Lindsay の校訂テクストと比べると、ヴァティカン写本 1549 の改編はやや大胆だが、「笑い死に」についての批判的コメントが、すでに昔からあったものとしてすっきり伝わるように工夫されている。ヴァティカン写本の質の高さを示すと共に、「ゼウクシスの笑い死に」に付けられたコメントの扱いに苦慮している様子も伝わってくる。死と笑いをめぐる思想状況が古代から 1500 年の間にかなり大きな変化を遂げてきたのだろう。

確たる史料がないのだが、「ゼウクシスの笑い死に」の伝説は、ディオゲネス・ラエルティッポス『ギリシャ哲学者列伝』7.185 で語られているクリュシッポスの「笑い死に」と混淆しながら近世まで伝えられたのではないかと推定される。他に「笑い死に」などについての伝承は見当たらないからだ。クリュシッポスの伝承とゼウクシスの伝承が、「笑い死に」つながりでどう絡み合うかは興味深いテーマだが、本稿は立ち入れない。

「ゼウクシスの笑い死に」伝説の伝承が少しでも明らかになり、近代絵画の解釈などにも役に立つことがあるかと考えて、この一文をまとめた。